



昨年の秋季企画展示期間に、関連テーマについて専門研究者を招き、2回にわたり講演会を開催しました。前号にひきつづき、この講演について、今回は第二回目の様子を、館長の追想記により振り返ります。

技をかくす日本建築の技 —— 建築史家、矢ヶ崎善太郎氏の講演

荒屋舗 透 (中部大学民族資料博物館 館長)



江戸時代の書院建築を移築した中部大学の洞雲亭

桂離宮はその端整な様式美をドイツの建築家ブルーノ・タウトが絶賛した日本建築のひとつだが、昨年秋の民族資料博物館主催の講演会で、私ははじめて桂離宮が「移築・増築・修築」をくりかえす、日本の木造建築の宿命からつくられた、いわば偶然の建築美であることを知った。

今回は前号のニュースレター (vol.13, 2017年10月) で少しふれた、京都工芸繊維大学准教授の矢ヶ崎善太郎氏による講演をご紹介します。民族資料博物館で昨年10月19日から本年1月11日まで開催された、企画展覧会『河本礫亭・五郎とシルクロード』展にちなみ講演会が2回あり、陶芸家の七代加藤幸兵衛氏の講演 (10月19日) にいたる準備を前号でふりかえったが、つづく11月14日、本学の附属三浦記念図書館での矢ヶ崎氏のお話も実に刺戟的な内容であった。演題は『茶室に学ぶ、茶人の知恵』である。以下、矢ヶ崎先生の講演抜粋ではなく、私の興味あるところを記してみる。

講演はまず「日本家屋の仮設性」あるいは「臨時性」という話から始まった。

そして茶室もまた、そうした仮設性と臨時性をもち、部分を構成する建材には、つねに「いかに巧く外すことが出来るか」つまり、いかに巧く解体や修理が出来るかという技が隠され、その隠す技こそ職人の腕の冴えるところなのである。例えば建材の木と木を直線ではなく「継手」あるいは、垂直につなぐ「仕口」は木の内部に隠され、外からでは見えない。しかしそれらは「いかに巧く外せるか」をポイントにしている。日本の大工は見えないところにこそ細心の注意を施したようだ。そしてそれはまた、移築・増築・修築という日本建築の運命がもたらした結果なのである。矢ヶ崎氏は数寄屋大工の「覚悟」(*心得) というものを示し、そのひとつに山上宗二の記した「茶湯者の覚悟十体の事 一、上をそそうに 下を律儀に 物のはずをちがわぬ様にすべし」を引用した。要するに「表面をさりげなく、見えない所を入念に」との教えである。さらに、そうした数寄屋建築の代表である茶室のなかでも、煎茶室に矢ヶ崎氏は注目する。なぜならば「煎茶文化の影響を受けた数寄屋の建築は、ここ

(*幕末から昭和初期) でまた新たな展開を見せ、やがて近代和風建築という新様式へと昇華していく>(*講演当日の配布資料より) からだ。

煎茶の文化にとり重要なのは何よりも「自然観」であった。いまでも日本の個人住宅の庭のなかに、山水を模した石や樹木を配するのは、その名残であろう。そしてこの自然観とは、古典中国の仙郷(桃源郷)であり、それは江戸期に煎茶文化の文人趣味に継承され、近代和風建築を形成する。茶人の知恵とはその美学なのである。

民族資料博物館の2017年秋季企画展覧会『河本礫亭・五郎とシルクロード』展では本学学生、一般市民など多くの来館者を得たが、展覧会準備と催事にあたり、私には貴重な人々との出会いがあった。陶芸家の加藤幸兵衛氏と建築史家の矢ヶ崎善太郎氏はそうした方々である。最後になってしまったが、ここで記すことの出来なかった方々、この『河本礫亭・五郎とシルクロード』展の開催にあたり、ご尽力くださった多くの方々に深く感謝申し上げ、拙稿を閉じることにする(*は稿者註)。

索引

◇巻頭
1 技をかくす日本建築の技 — 建築史家、矢ヶ崎善太郎氏の講演
民族資料博物館 館長 荒屋舗 透

2017 秋季・冬季行事報告

◇企画展示
2 10月 秋季企画展「河本礫亭・五郎とシルクロード」展示
民族資料博物館 原田千夏子

◇講演
3 10月 11月 秋季連続講演 秋季企画展「河本礫亭・五郎とシルクロード」関連テーマ
民族資料博物館 原田千夏子

◇授業見学
4 11月 CAAC 連続講座内 授業見学における作品解説
民族資料博物館 原田千夏子

◇成果発表展示
4 3月 平成 29 年度 特別講座(古典絵画) 受講生制作
作品発表展示 — 模写「鳥獣戯画」と作品一 報告
日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員 下川辰彦
民族資料博物館 原田千夏子

◇作品講評会
5 4月 特別講座(古典絵画)平成 29 年度受講生制作
作品講評会
日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員 下川辰彦

◇トピック
6 大学資料の紹介「千村俊二作
(想定現状再現模写 源氏物語絵巻(柏木三))」

2018 下半期(秋季・冬季)行事案内

10
月

企画展示

秋季企画展「河本礫亭・五郎とシルクロード」

| 期間 | 2017年10月19日(木)～2018年1月11日(木)

| 会場 | 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、1階エントランス

企 画：中部大学民族資料博物館

荒屋鋪 透、前田富士男(客員教授)、原田 千夏子

担 当：原田 千夏子

入場者数：1,956名

大学において平成15年から寄贈を受けた約600点の陶磁器作品や茶器資料のうち、博物館では、地元地域に関連するテーマに合わせて、瀬戸焼の二人の現代陶磁器作家に焦点をあて、約60点の作品資料を紹介する企画展示を行った。企画内容には、当館の学習提案の柱の一つとして「シルクロード文化圏を軸とした比較文化による観点」を念頭に入れ、展示解説に、瀬戸焼の染付磁器の発展の背景に、源流となる中国磁器の技術や様式が海陸のシルクロードを通じて西アジアやヨーロッパの流通経済とともに発達したという文化的地盤を視野に取り入れることで、瀬戸焼の古今の位置づけにアプローチできる観点をもつよう意識した。さらに、もう一つの当館の学習提案の柱でもある「素材研究」の観点からは、磁器の焼成法の違いによる色味を示す材料サンプルや現代の加工彩料、専用筆を瀬戸の関連企業から、また比較として日本画における天然顔料を日本画家からお借りす

ることができ、作り手の側の視点を加えることができた。作品の実物に、産業発展の歴史的背景と制作の素地の解説を合わせることで、作り手とともにその周辺の社会の姿を連想できるような鑑賞の場を構成するよう工夫した。

今回の展示作品の作者、河本礫亭と河本五郎は、大正から昭和にかけて東海地域で活躍した作家で、戦前から戦後にかけて、日本における生活様式や価値観が大きく変化する時代性のなかで力強くそれぞれの生き様を作品制作に懸けて生きた。生活のなかでの焼物自体のあり方も21世紀の今、また日々変わりつつあり、若者の多くは地場産業との接点を持つ機会は一層少なくなっている。それゆえに、博物館では、地域における「ものづくり」に挑んだ先人たちの、古今をみつめて自身の行方を探求した果敢な姿を断片でも紹介したいと強く思った。若者らが未来を想うときに、記憶の一隅に添えられることがあれば幸いである。今後の企画展示テーマには、こうした



2017 秋季展 展示室風景



(上) 展示案内 表面

(下) 展示案内 裏面

メッセージ性をより重視して検討していきたいと考えている。

また、もう一つの新たな試みとして、常設展示エリアであるシルクロード室を企画展示用に活用する際に、青色を基調とする染付磁器が主要な展示作品となることから、思い切って既設の展示ケースの内装や壁面の一部に青色を採用した。また天井と展示ケース内部の照明を増設し作品の見え方をこれまで以上に検討したことで、個々の作品と室内全体の統一感との両面を再考した新たな鑑賞空間を提案するにいたった。

このたびの展示開催には準備期間が非常に短いなか、多くの皆様がご厚情を惜しみなく向けてくださり、展示の実現がなかった。ご協力をいただいた全ての皆様にあらためて深く感謝するしだいである。(原田)

10月
|
11月

講演

秋季連続講演 秋季企画展「河本礫亭・五郎とシルクロード」関連テーマ

第1回 | 日時 | 2017年10月19日(木) 14:00~15:30
| 会場 | 中部大学附属三浦記念図書館 3階セミナールーム

題目: 「染付とシルクロード
—河本礫亭・五郎展によせて」

講師: 七代 加藤 幸兵衛氏
(陶芸家・多治見市無形文化財「三彩」保持者)
司会: 中村 文治氏(株式会社 桂花堂 代表取締役)
企画: 中部大学民族資料博物館
荒屋 鋪 透、前田 富士男(客員教授)、
原田 千夏子

参加者数: 50名



第1回 講演の様子

講師の加藤幸兵衛先生は、美濃焼の名窯である幸兵衛窯の七代を継承する陶芸家である。古陶磁の表現技法の再現から、さらに現代作品に昇華させる創作表現まで、幅広い時代性を見据えられている。「三彩」の無形文化財保持者として意欲的に活動されるなか、ペルシャ陶器の伝統的な制作技法をイラン他の若手作家に対して技術指導を行われており、国際的に文化財保存活動においても活躍されている。今回の講演においても、シルクロードをキーワードに、染付磁器の歴史とその技法様式の特徴について詳しくお話しいただいた。

講演会場には、御所蔵の貴重なペルシャの古陶器作品をお持ちくださり、講演の聴衆に実際に古の器肌を披露していただいた。

また講演終了後には、別室の企画展示会場へもお運びいただき、聴衆の皆様丁寧に一つ一つの作品の技法的特徴を解説いただき、大変有難かった。

瀬戸・美濃の焼物は、私たちの身近な生活空間に溶け込んでいるが、地元の作家たちが、先祖代々にわたり、研究を重ねて継承してきた努力の結晶のもとで現在につながっているという「ものづくり」の環境の背景をあらためて認識することのできる有意義な機会となったと思う。加藤先生のご講演の様子を本学のメディア教育センターの協力により撮影記録をさせていただいており、許可をいただき、後日、展示期間中に展示室において大型モニターの映像で一部を放映させていただいた。以来、展示室に長く滞在

する来館者が一層増え、多くの方がモニターの前で熱心に耳を傾けご覧いただく姿をよく目にした。あらためて、焼物の産地である東濃地方における意識の高さを実感し、身近にこうした文化的環境があることを再認識し、誇らしく思った。また講演参加者から「学生の参加が思うより少なく、非常にもったいない」という言もいただいた。作り手の「生」の声を聴くことのできる場として、講演記録を放映した試みの意義もおさら後に実感が増した。

司会の中村文治氏には、秋季連続講演、および秋季企画展示の開催にあたり、陶磁器作品の取扱い等について、さまざまな面で御支援、御指導いただいた。この場をお借りして謝意を表したい。(原田)

第2回 | 日時 | 2017年11月14日(火) 15:00~17:00
| 会場 | 中部大学附属三浦記念図書館 3階セミナールーム

題目: 「茶室に学ぶ、茶人の知恵」

講師: 矢ヶ崎善太郎氏(京都工芸繊維大学准教授)
司会: 下川辰彦氏(日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員)
企画: 中部大学民族資料博物館
荒屋 鋪 透、前田 富士男(客員教授)、
原田 千夏子

参加者数: 57名



第2回 講演の様子

矢ヶ崎善太郎先生は、以前にも当館の企画講演で、近代における茶室建築の多様性についてお話しいただき大変好評を得た。多くの方に再演のご希望の声を

お寄せいただいたことから、今回は茶陶の焼物に関連する企画展示の会期に、かつての続編として、茶室建築についての別の側面についてお話しいただく機会

を得た。

日本では、茶室を移築することによって先人から建築物とともに建築物の歴史的背景をもあわせて敬意を表し、その歴史自体にも

価値を見出されてきたという。また、それぞれの時代性に応じて再解釈を付加して改築する点も、時代の美的感覚を作り出してきた日本人らしい価値観として注目すべきものということである。このような価値付けは日本の茶室独特のあり方であり、日本の風土観ならではの発想であろうという指摘に、例えば本学の利休茶室

(再現建築)、また県内の犬山市の国宝「如庵」が挙げられた。先人の息吹を感じ取ることでできる誇るべき文化的財産が存在している環境が身近にあることを、参加者は再び気付かされたのだ。

また司会の下川辰彦先生からは、日本における水墨画の発達の経緯と、近世の庭園に対する江戸

期の人びとの趣向との関係性についての印象が述べられ、大変興味深いテーマが投げかけられた。建築と絵画というように、別の分野の専門研究者が集う風景は、かつての日本で日常にあったであろう、文人たちの自由な語らいの場にも似ているかもしれず、新たな美の発見を喜び合う楽しい空間となったひとときであった。(原田)

11月

授業見学

CAAC連続講座内 授業見学における作品解説

日時 | 2017年11月10日(金)
場所 | 中部大学民族資料博物館 多目的室

解説作品：模写《源氏物語絵巻(柏木三)》、
模写《扇面古写経絵》、
模写《平治物語絵巻(六波羅行幸巻)》

解説担当：原田 千夏子(民族資料博物館)

参加者：14名

本学のCAAC連続講座内における「源氏物語」を学習テーマとする授業見学で、本学所蔵の日本画の古典絵画の模写作品についての解説依頼を受けて説明をした。この時間に、当館では模写《源氏物語(柏木三)》の他、模写《扇面古写経絵》、模写《平治物語絵巻(六波羅行幸巻)》の3点を特別公開した。これらの模写作品は、本学教員(当時)と愛知県立芸術大学の日本画専

攻(模写班スタッフ)が共同研究によって、高度な専門技術を駆使したもので完成度が非常に高い。国宝や重要文化財の優品の姿を眼前で、詳細をじっくり観察できる意味においても、優れた教育資料として当館では活用している。

今回は、平成25年に当館で「素材研究」に関する企画展示において作成した日本画の顔料による重ね塗りの表現効果を実際



作品解説の様子

に和紙に顔料を用いて再現した実験パネル標本や参考画像をあわせて紹介した。日本独自に発達した繊細で豊富な色彩感について、国風文化の発達した平安時代の衣料や絵画に共通した特徴を、具体的な材料の性質を例にすることで、伝統的な材料面からの観点から作品に一步入り込み、作り手の観念に近づくことのできる観察を加えられると考える。鑑賞の楽しさを伝える試みを今後も増やしていきたい。(原田)

3月

成果発表展示

平成29年度 特別講座(古典絵画) 受講生制作作品発表展示 ——模写《鳥獣戯画巻》と作品

期間 | 2018年3月22日(木)~4月12日(木)
会場 | 中部大学民族資料博物館 多目的室、1階エントランス

出品：平成29年度 特別講座(古典絵画)受講生

賛助出品：下川 辰彦

展示指導：下川 辰彦(日本美術院特待・民族資料博物館 外部専門委員)

企画：原田 千夏子(民族資料博物館)

入場者数：442名



展示案内(表面)



展示案内（裏面）

当館主催で開講している一般対象の生涯学習プログラム、日本画実技制作の講座（有料・定員制・通年）の受講生による制

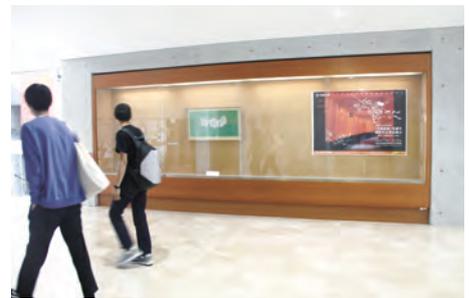
作作品の成果発表展示を行った。本講座では、絹絵、板絵、日本画といったさまざまな基底材による制作を自由選択で同時に学習できる環境になっている他、今回は、各自の自由課題の一方で、全員で国宝《鳥獣戯画卷》（平安時代）の再現模写に挑戦した。原本は絵巻物のため、担当場面を受講生によって区切り、現代の材料を特別な技法によって古色に仕上げる手法を指導講師の指導によって試み、古の絵師による巧みな墨の線描と濃淡を味わい

ながら、それぞれ臨写、上げ写しを行い仕上げていった。

他方、創作作品と並行して工程を進めていくスケジュール進行については、限られた回数の中かで講座の時間帯では指導講師の指導を仰ぎ、講座の行われない夏季や冬季の大学長期休暇期間中に各自が自身の時間配分を調整しながら行っていく姿勢で、時間を惜しみつつ熱心にそれぞれがあたっていた充実した期間であったと想う。（原田）



特別講座 展示室風景



エントランス風景（賛助出品作品展示）

4月

作品講評会

特別講座（古典絵画） 平成29年度 受講生制作作品講評会

【期間】 2018年4月12日（木） 14：00～15：00

【会場】 中部大学民族資料博物館 多目的室

講評： 下川 辰彦（指導講師・日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

担当： 原田 千夏子（民族資料博物館）

参加者数： 30名



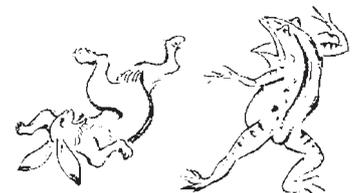
講評会の様子

指導講師の説明からあったように、今回のような模写制作の目的は、古典絵画にある材料や技法を学びながら、その特徴を現代の作品制作に活かすこととしている。そのため模写制作の段階においても、単に複製をする作業としてとどめるのではなく、常に絵画作品として、空間把握、美的な彩色効果を意図しながら、また原本の経年劣化した色合いや汚れを模写作品にどの段階に留めて再現するか、という作品全体に意識を配る大切さを学ぶために、指導講師より今年の課題

として掲げられたのだった。講評会のなかでは、制作者本人による、作品の仕上がりに対する所感を述べ、それに対して指導講師が、作品の画面のなかにおける重要な観点を具体的に指摘されていった。また、講師自身がかつて指導を受けた際の貴重なエピソードを盛り込まれながら、模

写と創作作品に向かう姿勢について話された。

講評会の最後には、指導講師より、新年度において新たに挑戦する課題の模写作品も数点発表され、新年度にむけての次の制作にあたる意欲が一層会場に高まった。（原田）



大学資料の紹介

千村俊二作 想定現状再現模写 源氏物語絵巻「柏木三」

(2010年、学校法人中部大学蔵)
(原本：徳川美術館、平安時代、12世紀、国宝)



この模写作品は、本学の特別研究費Aの助成を受け、本学教員(当時)と愛知県立芸術大学日本画専攻研究室(模写班)が共同研究によって平成20年度から2年間にわたる古典絵画研究のなかで制作された3点の模写作品のうちの一作です。

再現模写とは、経年の古色や劣化を含めて現在の状態を再現した模写であり、当初の天然材料にできるだけ近い材料を用いて、本来の彩色や形態描写を想像しつつ、現代の材料によって欠損部分を模写によってどこまで、どのように補い再現するか、制作者の感性と手腕が試されます。この模写作品の作者は画面の明るさの

度合いや、また現物にできた紙面の折りや汚れについて、画家として作品が美しくみえる状態を優先し、検討を重ね取捨選択していったといえます。この画面は物語で劇的な場面です。絵画表現においては光源氏の表情をうかがうことのできる特に重要な場面とされています。人物の目鼻は実は細緻な墨線を複数重ねて非常に丁寧に線描を施しています。描き手が筆先に込めた渾身の思いはいかほどであったか想像に耐えません。現代画家の目を通じて、古の画人の「超絶技巧」の再現という難しい課題に挑戦したまさに力作といえましょう。

制作者の千村俊二先生(日本美術院特待)は、長年、愛知県立芸術大学日本画研究室による委託事業として模写制作を行う模写班の主任として国宝や重要文化財指定の数々の優品の模写を手がけられ、日本絵画における古典技術の研究とその継承に寄与されていらっしゃいましたが、2017年秋にご逝去されました。

末筆でございますがここに記し、千村先生に心より感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

2018

下半期(秋季・冬季)行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇常設コレクション展

「仮面のありか、フェースのゆくえ…」(仮称)

会 期：2018年10月中旬～2019年1月中旬予定
会 場：中部大学民族資料博物館 シルクロード室 他

◇秋季連続講演(秋季企画展関連テーマ)

2018年秋季予定

